

アジア・アフリカ言語文化研究所

東京外国語大学

要覧 1988



# 研究部門構成

研究部	研究部門 (開設年度)	研究分野または対象とする言語文化
一般	言語文化第Ⅰ (1964年度)	一般言語学理論・文法記述理論・語彙記述理論・コンピュータ言語学・一般音声学理論・音素論・音声実験理論など
	言語文化第Ⅱ (1967年度)	民族学・歴史学・地理学など
	言語文化第Ⅲ (外国人客員研究部門) (1979年度)	言語・文化、民族学、歴史学、地理学等の分野における、特に現地人研究者又は現地研究の欧米専門家との共同研究による地域研究法の開発
東アジア	東北アジア (1966年度)	朝鮮語・ツングース語(満洲語・その他のツングース語)・極北諸語(チュクチ語・ユカギル語・ギリヤーク語・アイヌ語など)および文化
	中国第Ⅰ (1968年度)	中国諸方言(北京語・呉語・福建語・広東語・客家語など)および文化
	中国第Ⅱ (1979年度)	チベット語(現代チベット語・チベット文語など)・イ語(ロロ語)・チュワン語・回族の諸言語などおよび文化
北および中央アジア	モンゴル・シベリア (1982年度)	モンゴル諸語(ハルハ方言・ブリヤート方言等)・カルムイク語・モンゴル語・タグル語・モゴール語および文化
	トルコ・ウラル (1971年度)	チュルク諸語(トルコ語・オスマン語・ウイグル語・ウズベク語・タタール語・チュヴァシ語・ヤクート語など)、ウラル諸語(フィンランド語・エストニア語・ハンガリー語・サモエード諸語)などおよび文化
東南アジア	インドシナ第Ⅰ (1964年度)	ベトナム語・タイ語・ラオス語などおよび文化
	インドシナ第Ⅱ (1969年度)	ビルマ諸語・モン語・カンボジア語などおよび文化
	インドネシア・オセアニア (1967年度)	インドネシア語(マライ語)・ジャバ語・タガログ語・ピサヤ語・マラガシ語・メラネシア諸語・ポリネシア諸語・パプア諸語などおよび文化
南アジア	インド第Ⅰ (1965年度)	ヒンディー語・ウルドゥー語・ベンガル語・マラーティー語・クジャラーティー語・シンハリー語・サンスクリット語・バーリ語などおよび文化
	インド第Ⅱ (1978年度)	ドラヴィダ諸語(タミル語・テルグ語・カンナダ語・マラヤラム語)・ムンダ諸語および文化
西アジア	イラン (1972年度)	ペルシア語・クルド語・バルーチ語・バシュトー語・アルメニア語・グルジア語などおよび文化
	アラビア (1966年度)	イラク方言・シリア方言・エジプト方言・マグリブ方言・アラビア文語・ヘブライ語(現代ヘブライ語・旧約ヘブライ語)・アラム語・アムハラ語などおよび文化
アフリカ	アフリカ第Ⅰ (1964年度)	スワヒリ語、キクユ語、ガンダ語、ルワンダ語、スクマ語、ベンバ語、ショナ語、ズル語、コサ語、ウンブンドゥ語、コイサン語、ソマリ語、ガラ語、ディンカ語などおよび文化
	アフリカ第Ⅱ (1987年度)	ハウサ語、フラニ語、ウォロフ語、バンバラ語、メンデ語、アカン語、ヨルバ語、イボ語、カヌリ語、サンゴ語、ファン語、リンガラ語、コンゴ語、モンゴ語、などおよび文化

		目	次		
概	要		言語研修	15	
歴史と性格	1	海外学術調査	16		
組織	2	助手等の現地投入	17		
職員	4	外国人研究員	18		
研究活動		施設			
共同研究プロジェクト	5	電算機室	20		
共同研究員(公募)	12	図書室	21		
研究生	14	音声学実験室	22		
言語情報機械処理	14	出版物一覧	23		

## 概 要

### 歴 史 と 性 格

アジア・アフリカ言語文化研究所は、人文科学・社会科学系では、わが国ではじめての共同利用研究所です。

本研究所の目的はアジアおよびアフリカの言語文化に関する総合研究、これらの地域における諸言語の辞典編製、および教育訓練を行うことにあります。

すなわち：

- 1) アジア・アフリカの言語、およびそれを通じて、これらの地域の歴史・社会・文化を直接研究すること。
- 2) それらの言語による資料の利用を容易にするための辞典を作ること。
- 3) それらの言語習得を助けるため、言語研修を実施すること。

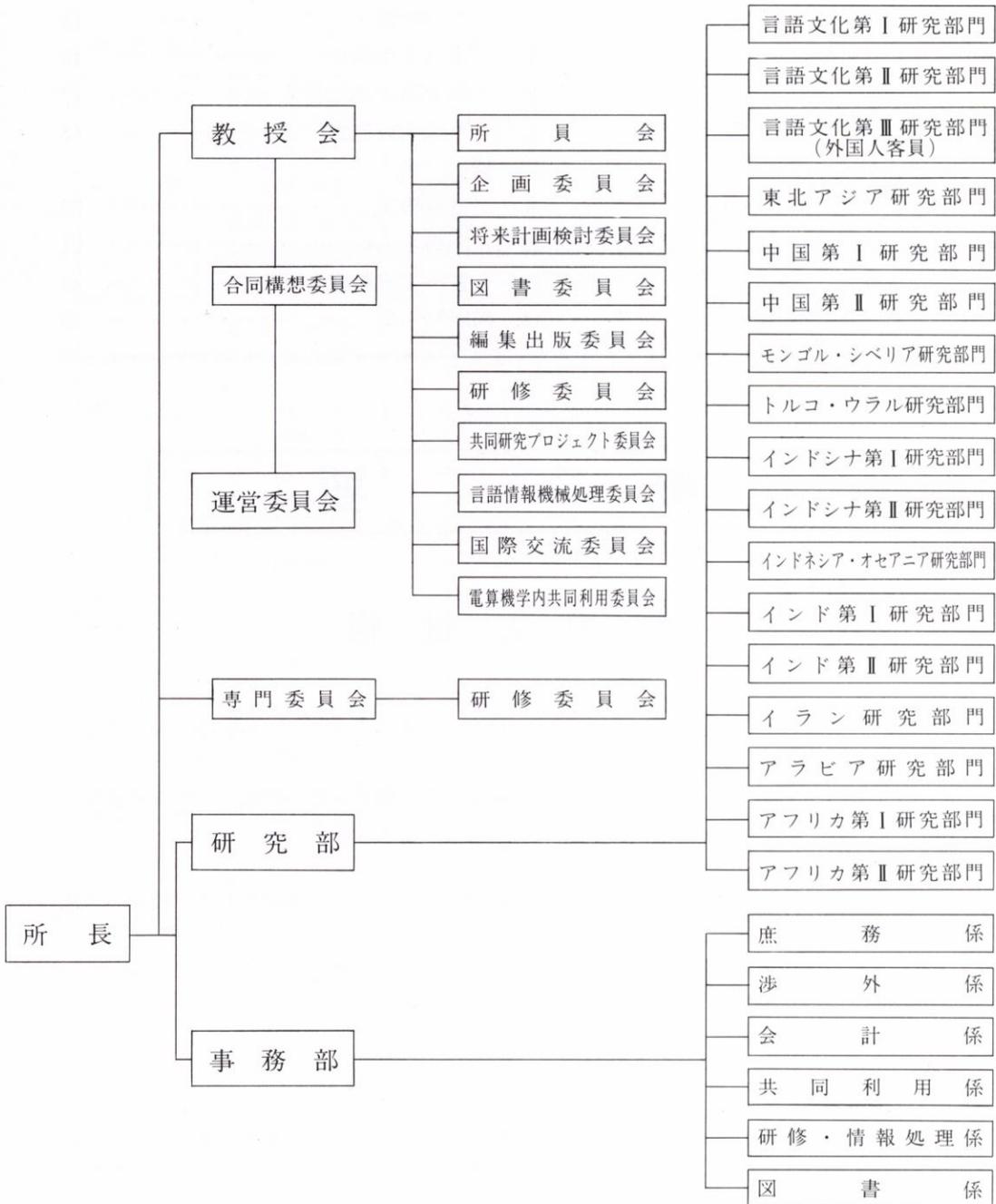
以上の三点が本研究所の主要な目的です。

\*             \*             \*

共同利用研究所は、あらゆる種類の研究機関に所属する専門の研究者の便宜をはかるために設備や資料を提供し、相互の接触や交換の機会をつくり、それによって研究の発展・進歩を促すことを目的としています。

戦後日本の復興が進むとともに、その運命がアジア・アフリカ諸国と深くかかわりあっていることが認識されはじめました。このような背景のもとに1961年に学術会議がアジア・アフリカ言語文化研究所を設立するよう勧告しました。その後、各方面の理解と協力を得て、1964年4月1日に、東京外国語大学の附置の共同利用研究所として本研究所が設立されることになりました。以来、整備拡充が進み、今日では17部門の研究所に成長しました。

# 組 織



(1988年6月1日現在)

区 区	教 授	助 教 授	講 師	助 手	その他の職員	計
定 員	(2) 16	16	0	8	29	(2) 69
現 員	(2) 16	13	0	8	29	(2) 66

( ) は外国人客員数を外数で示す

## 運営委員会

研究所の日常の業務の運営は、教授・助教授で組織する教授会において行われますが、共同利用研究所としての公開性を保つため、これとは別に運営委員会が置かれ、研究所の運営の基本方針などの重要な事項について、所長の諮問に答えます。運営委員には研究所の教授・助教授、および所外の学識経験者など、25名以内が委嘱されます。第12期(1987. 2～1989. 1)の運営委員は現在以下の通りです。

荒松雄	津田塾大学教授 (東京大学名誉教授)	田町常夫	福岡工業大学教授 (九州大学名誉教授)
飯島茂	所員	中根千枝	東京大学名誉教授
池田修	大阪外国語大学教授	中村平次	所員
石井米雄	京都大学 東南アジア 研究センター所長	西田龍雄	京都大学教授
石川榮吉	中京大学教授	本田實信	名古屋商科大学教授 (京都大学名誉教授)
大江孝男	所員	三根谷徹	國學院大学教授 (東京大学名誉教授)
小澤重男	東京外国語大学教授	護雅夫	日本大学教授 (東京大学名誉教授)
興水優	東京外国語大学教授	矢内原勝	慶応義塾大学教授
佐々木高明	国立民族学博物館教授	山田善郎	大阪外国語大学学長
柴田武	東京大学名誉教授	渡部忠世	放送大学教授 (京都大学名誉教授)
祖父江孝男	放送大学教授		
谷泰	京都大学教授		

## 専門委員会

また、所長の諮問に応じて、研究所の共同研究に関する専門的事項を審議する専門委員会があり、委員は所外の学識経験者のうちから委嘱されます。1988年度の委員は以下の通りです。

### 研修委員会

池上二良(札幌大学教授、北海道大学名誉教授)、池田修、大河内康憲(大阪外国語大学教授)、大東百合子(津田塾大学学長)、小澤重男、北村甫(麗沢大学教授)、東京外国語大学名誉教授)、興水優、柴田武、柴田紀男(天理大学教授)、鈴木斌(東京外国語大学教授)、西田龍雄

# 職員

所長 (併) 梅田博之

## 研究部 (五十音順)

教授	助教授	助手
飯島 茂：異文化の接触	池端 雪浦：現代フィリピン政治と宗教	栗原 浩英：ヴェトナム現代史
梅田 博之：朝鮮語	石井 溥：南アジアの人類学	栗本 英世：東・北東アフリカの人類学
大江 孝男：朝鮮語	加賀谷良平：音響音声学, アフリカ諸言語	高知尾 仁：世界表象と象徴性
岡田 英弘：東アジア史	梶 茂樹：パントゥ諸語	中澤 新一：チベット仏教の人類学的研究
上岡 弘二：イラン語, イスラムの民間信仰	新谷 忠彦：言語哲学	林 徹：トルコ語
川田 順造：アフリカ文化	内藤 雅雄：インド現代史	松村 一登：フィン・ウゴル諸語
坂本 恭章：オーストロアジア諸語	中嶋 幹起：漢語	峰岸 真琴：インドシナ諸言語
中野 暁雄：アフロ・アジア諸言語及びその民族誌	中見 立夫：内陸・東アジアの国際関係史	宮崎 恒二：インドネシアの諸社会
中村 平次：南アジア現代史	羽田 亨一：サファヒー朝文化史研究	
奈良 毅：インド・アーリア諸語	松下 周二：アフリカの言語	
永田 雄三：トルコ史	水島 司：南インド近・現代史	
原 忠彦：イスラム教徒文化社会	森 幹男：インドシナ比較文化史	
日野 舜也：アフリカ都市社会の比較研究	守野 庸雄：日本語・スワヒリ語対照研究およびス・ス辞典編纂	
家島 彦一：インド洋・地中海における中世交易港の比較研究		
山口 昌男：文化記号論		
湯川 恭敏：理論言語学, パントゥ諸語		

## 事務部

事務長 文部事務官 山本 唯雄	会計係	研修・情報処理係
事務長補佐 " 渡邊 仁	係長 文部事務官 平井 榮治	係長 文部事務官 浅見 義則
	" 乙訓 寛雅	" 岡田ほなみ
庶務係	" 藤崎 英朗	" 中嶋 弘子
係長 文部事務官 石橋徳三郎	" 佐伯 季之	文部技官 今井 健二
" 神田 環	用務員 植田カツエ	
" 谷川かつ子		
" 藤井 貞人	共同利用係	図書係
文部技官 塙 和雄	係長 文部事務官 名倉武二郎	係長 文部事務官 石川 恵子
	" 金井 京子	" 中川 陽子
渉外係	" 津田 貞子	" 鈴木喜久子
係長 文部事務官 田川 恵二	" 大村 和子	" 須郷 知子
主任 " 佐久間敬喜	" 佐々木 毅	" 栗瀬 篤司
" 堀 浩		

# 研 究 活 動

## 共同研究プロジェクト

共同利用研究所での研究は、所員が個人研究テーマを持って研究を行うとともに、所外の研究者と協力することになっています。そのために共同研究員の制度があり、共同研究プロジェクトを組織し、研究を進めています。1988年度のプロジェクトは研究の研究計画と共同研究員は以下の通りです。

なお( )内は研究代表者です。

### 言語研修 (大江孝男) 所員 18名

本年度に予定する事業及び研究活動は次の通り。

1. 研修講座：実施対象言語—東京会場：ペルシア語，トルコ語；大阪会場：インドネシア語
2. 専門委員会2回(63. 5, 64. 3)，成果報告・検討のための専門委員・共同研究員合同会議1回(63.10)
3. 研修教材作成と研究連絡のための研究会：東京・大阪2回(計4回)
4. 自動化研修のための電算機補助プログラム開発班の研究会：東京3回(63年6月，9月，12月)

以上の課題をもって、前年度に引き続き本研究所の言語研修に関する諸問題を検討するとともに、日本語との対照研究を通じて対象言語の特徴を把握し、教材と方法などの改善に役立てる。検討すべき課題は、①研修のあり方、②実施言語の選定と計画の検討、③実施方法(カリキュラム、テキストの構成、指導・訓練の方法、効果の測定、評価の方法、など)、④自動化研修の実現と利用に関する研究(自動化可能な範囲、実施可能な事業、プログラムの開発、必要な施設の検討、など)

大坪一夫	吉川武時	ヤマンラール水野美奈子	山口真佐夫
高田美佐子	浜畑祐子	森村 蕃	柏村彰夫

### 辞典編纂プロジェクト (梅田博之) 所員 9名

アジア・アフリカの諸言語の言語資料を蒐集、機械処理し、それに音韻論的、辞学的、形態論的、統辞論的分析を施し、これらの言語の辞典の編纂にそなえる。

慶谷壽信	武内紹人	辻 伸久	宮脇淳子
北村 甫			

## アフリカにおける都市化の比較研究 (日野舜也) 所員 11名

このプロジェクトは、アフリカ大陸全域において普遍的に進行している都市化をとりあげ、国民社会の形成、都市社会の構造、地域社会の形成と都市・村落関係の展開、伝統的王制社会の機能、イスラム教の機能、地域共通語の機能などの諸問題との関連に於て、共同研究をおこなうことによって、従来、個人的レベルで集積されてきた研究成果を組織化し、総合的な比較研究をおこなうことを目的としている。

今年度は、昨年度実施した文部省科学研究費補助金による現地調査の成果をふまえて、数回の研究会を行ない、比較研究を深めるとともに、今後の問題点を検討する。また一昨年来試みられているアフリカ都市研究関係の文献リスト作成をつづける。

赤阪 賢	小倉充夫	中村孚美	宮治美江子
阿久津昌三	門村 浩	端 信行	米山俊直
上田 将	小馬 徹	福井勝義	和崎春日
江口一久	嶋田義仁	前山 隆	和崎洋一
大森元吉	富川盛道	松園萬亀雄	渡部重行
小川 了	富永智津子	松田素二	和田正平

## 南アジア諸言語の研究とそのデータベースの作成 (奈良 毅) 所員 4名

本年度における南アジア諸言語の口語形基本語彙調査のための調査票を作成し、その調査票に基づいたインフォーマンとの面接調査と調査結果の電算機入力を行なう。なお前年度に入力した文献資料をベースに作成するKWICを印刷刊行する。

内田紀彦	林 典門	溝上富夫	藤井 毅
坂田貞二	町田和彦	藪 司郎	

## イスラム圏における異文化接触のメカニズム (家島彦一) 所員 7名

イスラム圏はその歴史的展開と地理的拡大の諸過程において、さまざまな社会・文化・生態との接触・共存と融合を達成し、相互の矛盾・衝突をはらみつつ、同時に一つの共通文化圏としての世界を形成した。本プロジェクトの目的は、そうした多重・異質と統一・均質の二元的性格をもったイスラム圏の社会・文化にみられる接触のメカニズムを究明することにある。

本年度は昨年度に引きつづき、テーマ「市(sūq/bāzār)の比較研究」の研究テーマをとりあげてイスラム圏における市の果たす社会経済的、文化的機能、中立地としての場のルール構造、ネットワークを通じての他世界との接触関係などについて共同研究をおこなっていきたい。さらに、市の歴史的展開と現代における変容過程イスラム圏外の市との比較研究、地理学、社会学、農業経済や都市問題の立場など、多分野からの学際的研究も深めたいと考えている。

赤阪 賢	後藤 明	柘植洋一	森川孝典
石原 潤	佐藤次高	奴田原睦明	山形孝夫
川瀬豊子	真田 安	原 隆一	斎藤寛海
川床睦夫	蒨 勇造	三木 亘	信岡奈生
私市正年	関本照夫	宮治美江子	松木栄三

## インド・アリアー・チベット・ビルマ系文化の接触・変容の研究 (石井 溥) 所員 3名

ヒマラヤ周辺地域の諸住民を主対象とし、

- 1) インド・アリア系言語・文化を基層としてもつ人々の文化・社会が、チベット・ビルマ系言語・文化と接触することで、どのような影響・変容をこうもってきたか。
- 2) チベット・ビルマ系言語を母語とする様々な民族が、インド・アリア系言語・文化、およびチベット系文化をどのように吸収、消化し、民俗文化と融合させてきたか、以上の両面を文化、社会、言語等の面から研究する。

当面は1年に1~2回研究会を開き、その後、海外調査を計画する。

出版物はMonumenta Serindica, YAKのシリーズの刊行を続ける。

永ノ尾信悟	長野泰彦	三瓶清朝	山本勇次
鹿野勝彦	西 義郎	森 雅秀	奥山直司
北村 甫	藤井知昭	安野早己	島 岩
立川武蔵	星実千代		

## 象徴と世界観の比較研究 (山口昌男) 所員 4名

アジア・アフリカおよびアメリカの土着社会の説話・神話・儀礼などを、特に時間・空間観念との関連において研究し、この領域における比較研究及び民族学、神話学、言語学的諸分野間の方法論的接合点を探る。

青木 保	中村雄二郎	福島真人	梁 億寛
上野千鶴子	西村 康	松岡心平	渡辺公三
落合一泰	野田正彰	宮坂敬造	小川 了
小松和彦	野村雅一	山下晋司	横井 清
清水昭俊			

## アジア・アフリカ諸言語の比較・対照研究 (奈良 毅) 所員 16名

アジア・アフリカ諸言語の文法ならびに音韻構造を、同系統の他言語との比較あるいは他系統の言語との対照によって明らかにするため、文法部会、音韻部会をそれぞれ会合を開いて研究発表・討議を行なう。

刊行物としては、共同研究プロジェクト報告(通称年報)1冊と文法便覧2冊の予定。

伊豆山敦子	下宮忠雄	縄田鉄男	村崎恭子
岩田 礼	杉田 洋	新田哲夫	森口恒一
内田紀彦	杉藤美代子	橋本 勝	藪 司郎
大島 稔	高階美行	早田輝洋	山田幸宏
奥平龍二	田村すず子	原 誠	吉川 守
小田真弘	塚本明廣	福田権一	上野善道
金 東俊	土田 滋	福原信義	切替英雄
近藤達夫	角田太作	松田伊作	辻 伸久
坂本比奈子	富田健次	溝上富夫	アミール・モハバット

崎山 理	中井幸比古	三谷恭之	カリヤン・ダスグプタ
柴田紀男	長 弘毅	宮岡伯人	ツイオン・ペン・シムエル
柴谷方良	中島 久		

### 第三世界と日本 —現状と展望— (中村平次) 所員 4名

この共同研究はテーマの示す通り、今日の第三世界と日本の相互関係を特に最近の局面に関心を集中して究明し、その問題点を明らかにしようとする。以下にその特徴点を共同作業を進めるにあたり指摘しておく。

第1に、現代日本研究者の参加を得て、日本の現状認識を深める上で、その国際的な諸契機の所在の確認が要請されていると考える。そのために、政治・経済・思想の諸分野を包括する。

第2に、東アジアから中東・アフリカに及ぶ諸研究の問題関心を整理し これら諸地域と日本との史的な関連と問題点を抽出する。この他、欧米・西欧・ソ連研究者も加わり、グローバルな視角から、主題の解明を試みるものとする。

第3に、本研究は文字通り、インターディシプリナリーなアプローチを志向しており、主題に関する討論と討論成果の面で、相互に益するところもまた少なくないと考えている。

第4に、本研究プロジェクトは2年間に及ぶ計画であるが、各年度末に研究成果を出すのではなく、最終年度に成果刊行を考慮している。

金子 勝	桐山 昇	後藤政子	羽場久泥子
神田文人	古賀正則	高木真理子	文 京洙
木畑洋一	丸山直起	富永智津子	油井大三郎
木村英亮	毛里和子	西田美昭	

### 「未開」概念の再検討 (川田順造) 所員 3名

「未開」の概念は「文明」との対比で、民族学・文化人類学にとって基本的な重要性をもってきたが、その概念の形成された文化的、思想的背景、内容、研究概念としての有効性等については、十分な検討がなされてきたとはいえない。この共同研究では、

- 1) 文化史的発展段階としての「未開」と、思考構造上の「異世界」としての「未開」、
  - 2) 技術の文化と価値の文化、あるいは「未開」と「低開発」の関係、
  - 3) 日本をはじめとするアジア及びヨーロッパ文化も対象とすること、
- 等を重視して学際的に研究をすすめる。61、62年度は通算4回の研究会を行ない、「未開」概念形成の歴史的背景、異界としての「未開」世界、先史学・民族学からみた「未開」概念等について検討してきた。63年度は学問領域ごとの「未開」概念文明一般と西洋近代文明の関係等について検討をすすめてゆきたい。

阿部謹也	小松和彦	徳丸吉彦	松園萬亀雄
阿部年晴	坂部 恵	二宮宏之	宮田 登
綾部恒雄	住谷一彦	野村純一	安丸良夫
伊藤亜人	陣内秀信	野村雅一	山本吉左右

伊東俊太郎	谷 泰	船曳建夫	渡辺公三
大貫良夫	田村善次郎	古橋信孝	若桑みどり
大林太良	塚本 学	堀内 勝	関本照夫
小西正捷			

### 南アジアにおける社会集団形成過程に関する研究 (内藤雅雄) 所員 4名

多民族・多言語・多宗教・多カーストを包含する複合社会と規定される南アジア諸国では、そこで展開される社会・政治運動やその他の様々な社会現象にそのような特徴がしばしば色濃く反映してきたし今なおそうであるといえる。ただこれら南アジアの諸社会をより正確に把握するためにはいっそう緻密にその動態を考察することが求められる。本プロジェクトは、そうした作業の一過程として、南アジア諸地域で形成された様々な社会集団に関して、それら特定の社会集団を成立させしめた結合原理とはどのようなものであるのか、あるいはまたそこで起こった諸々の社会・政治運動をとりあげ、そうした特定の運動に人々をひきつけた要因・契機はどのようなものであるかといったことや、社会学・政治学・文化人類学・歴史学・文学など多方面から検討し、南アジア世界の現状把握への手掛かりとすることを旨とするものである。

石田英明	渋谷利雄	長谷安朗	柳沢 悠
河合明宣	鈴木正崇	藤井 毅	サンタジラン・カディルガマル
佐藤 宏			

### 第三世界の大衆文化の研究 (原 忠彦) 所員 2名

今日アジア・アフリカをはじめとする第三世界にあっては、TVの導入、識字率の向上、出版事情の好転等々相まって、急速に新しい大衆文化の形成、また既存のものの変化がおりつつある。この大衆文化は、各個別文化の枠を超えた人間生活不可決の営みとして重要であるばかりでなく、現実に社会的態度・個人の性格形成・言語のあり方等に大きな影響を及ぼしつつある。

本共同研究では、大衆文化のこのような性格・機能を解明する事を目的とするが、第一年度にあっては、個別事例研究にもとずいて各種方法論を検討すると同時に、比較の事由を作るために、第三世界以外の研究を含めた従来の知見を整理し、考究すべき事項の摘出を試みた。第二年度以降にあっては、文部省科研費等の利用により実地調査に基づいてアジア・アフリカ諸国の大衆文化の考察にあたり、従来他の分野に比して研究の遅れてきた当該領域研究の発展の糸口を作りたい。

麻田 豊	小西正捷	副田義也	野中耕一
稲増龍夫	小松和彦	田中多佳子	本田和子
岩男寿美子	坂田貞二	中野美代子	宮崎寿子
王 崧興	白水繁彦		

**東南アジア研究基礎資料のデータベース化に関する基礎研究**（坂本 恭章） 所員 7名

1. 東南アジア（言語文化）研究のためにデータベース化する必要のある基礎資料（碑文、年代記、民俗誌、言語学的及び文化人類学的現地調査の報告など）を調査し、その必要性、緊急度のランク付けを行なう。
2. それぞれの資料について、データベースとして有効に使用できるためには、どのような形態のデータベースでなければならないかを研究する。
3. 将来、この基礎研究の成果に基づき、実際のデータベース作成を目標とする。

石井米雄                  石沢良昭                  奥平龍二

**西アジア研究資料のデータベース化に関する基礎的研究**（永田雄三） 所員 6名

- (1) 西アジアの歴史・地理・言語・政治・経済等に関する資料（碑文・年代記・地図・地理書・伝記集・写本カタログ・統計資料・考古学的・社会人類学的調査報告等）のうち、データベース化に適した基礎資料の選定。
- (2) 選定された基礎資料のデータベース化の形態の決定。
- (3) (2)において形態の決定された基礎資料を将来データベース化する。

小野 浩                  内藤正典                  湯川 武                  北川誠一  
佐藤次高                  間野英二                  岡崎正孝                  清水宏祐  
鈴木 董

**アジア遊牧民の歴史と言語**（岡田英弘） 所員 4名

アジアの全体史像を構築するに当たって問題となる諸要素の一つは、内陸地域に広く散在する遊牧民の史的役割である。しかしその解明は史料の制約と用語・概念の未発達のために遅れた段階にある。この研究プロジェクトでは、満洲、モンゴルトルコ、チベット、ペルシア、アラビア等の地域の歴史と言語の専門家の協力のもとにできる限り一貫した叙述の可能性を探求することを目的とし、年2回の研究会を開催する。

河内良弘                  佐口 透                  浜田正美                  宮脇淳子  
北川誠一                  清水宏祐                  樋口康一                  森川哲雄  
栗林 均                  志茂碩敏                  松村 潤                  山口瑞鳳  
後藤 明                  庄垣内正弘                  間野英二                  吉田順一  
小山皓一郎

**東南アジアの政治と文化**（池端雪浦） 所員 3名

近現代の東南アジアの政治において、文化の問題はきわめて重要であり、またその問題領域は多岐にわたっている。本プロジェクトでは諸民族、諸文化間の比較を重視しつつ、つぎのような課題をめぐって研究を進めたい。(1)政治権力の正統性(2)民族社会のアイデンティティをめぐる文化政策(3)国民統合ならびに開発と文化的少数民族問題(4)政治運動と宗教のかかわり(5)外交政治思想の土着化(6)社会統合のプロ

セスにおける大衆文化の役割(7)制度，組織，法の規範と運用の二重性。このうち本年度は(1)(2)(3)に重点をおいて研究活動を進めたい。

赤木 攻	白石昌也	土屋健治	早瀬晋三
押川典昭	関本照夫	富沢寿勇	吉川洋子
北原 淳	高谷紀夫	根本 敬	

#### 多民族国家における異化・同化形態の比較研究 (水島 司) 所員 3名

本プロジェクトは、多民族国家における異化・同化の形態を、地域的・学際的に比較研究するものである。共同研究では、研究員それぞれの専門領域を基礎に、異質な諸文化の接触によってもたらされる各文化自身の変容形態と、そこで新たに生成されてくる文化形態を明らかにし、同時に、異化・同化の諸過程に着目することによって、各文化の特性を抽出するようにつとめる。それらの作業を通じて、異文化接触の一般的理論を見いだすことが最終的課題である。当面、典型的な多民族国家であるマレーシアを対象として、年に2～3回の研究会をもち、課題や方法についての議論を深め、数年以内に予定している現地調査の結果も踏まえ、研究成果を逐次公刊していきたい。

小野沢純	杉本 均	富沢寿勇	藤本彰三
加藤 剛	瀬川昌久	野村 亨	山下晋司
川崎有三			

#### 言語文化接触に関する研究 (中嶋幹起) 所員 4名

東アジア(中国大陸)に共生する幾多の諸民族の言語は多様性に富み、その長い歴史と相俟って、多くの言語資料が集積されている。さらに、中国の開放政策により、近年は学術成果も公にされつつある。本プロジェクトでは、満州語、モンゴル語、漢語、ウィグル語、チベット語、雲南の白語など、現地での研究体験もある、これらの諸言語の研究者が報告、討論を行ないつつ、基礎的な言語研究資料を逐次刊行する。

落合守和	高田時雄	樋口康一	森安孝夫
栗林 均	辻 伸久	星実千代	山川英彦
黒田信一郎	辻本春彦	前川捷三	横山廣子
慶谷壽信	津曲敏郎	村上嘉英	ウィリアム・バラード
庄垣内正弘			

## 共同研究員（公募）

1978年度より、共同研究プロジェクト（6ページ～11ページ）とは別に、当研究所において一定期間研究を行う共同研究員を公募しており、現在まで次の諸氏に委嘱しています。  
なお（ ）内は研究テーマです。

氏名	テーマ	氏名	テーマ
<b>1978年度</b>		吉田憲司	(アフリカ諸文化における色彩語彙ならびに色彩象徴に関する比較研究)
小馬 徹	(スワヒリ語の構文と統語法の研究)	Mohammad Naghizade	(The Agrarian Aspects of the Iranian Revolution—With Special Reference to the Rural Institutions and Farmers' Organization)
四宮宏貴	(インド・パキスタン分離独立の史的的研究)	堀川世津子	(イラン立憲革命におけるジャーナリズム)
平戸幹夫	(マレー農村社会におけるイスラム教)	松原孝俊	(口頭伝承の比較研究)
村上泰子	(統辞論および音韻論の諸規則にいかん意味の介入がおこなわれているか?)	<b>1984年度</b>	
<b>1979年度</b>		阿久津昌三	(アフリカ学術調査「スーダン・サーヘル地帯の研究」)
遠藤保子	(未開民族における舞踊の機能と構造について)	大月隆寛	(東アジアにおける Folk-lore 研究の現状と課題 現代社会における伝統文化の変容の問題を中心として)
木田理文	(近代早期社会における民衆運動の人間観に関する比較研究)	喜山朝彦	(東アジアにおける Folk-lore 研究の現状と課題 現代社会における伝統文化の変容の問題を中心として)
信森廣光	(現代マルタ語と北アフリカ諸言語における言語文化に関する総合研究)	黒田 卓	(アジアの民族運動とその国際関係)
福島邦夫	(民間説教者と言語芸術)	渋谷利雄	(アジアの民族運動とその国際関係)
宮脇淳子	(十七世紀のハルハモンゴル)	<b>1985年度</b>	
<b>1980年度</b>		小野 浩	(イラン語、特に古代・中世のイラン諸語の研究)
堀川 徹	(中央アジアとイスラム 16～18世紀中央アジアのイクターについて)	佐々木明	(新大陸作物受容と南アジア農村)
宮脇淳子	(15～17世紀の北アジア史研究)	佐島 隆	(トルコを中心とした宗教的文化の構造と動態)
山下晋司	(象徴と世界観に関する研究)	ト田隆嗣	(歌唱の伝承—マレーシア、ブナン社会からの問題提起)
山本真鳥	(言語文化比較研究資料)	鈴木 均	(19世紀イランの民衆運動とジャーナリズム)
<b>1981年度</b>		塚田誠之	(華南少数民族の歴史と文化—広東・広西の壮(Zhuang)族とその隣接諸族を中心に)
井谷鋼造	(オスマン・トルコ語史料の研究)	出口 顕	(神話とエスノヒストリー。中央～南部バントゥ社会の事例の分析)
内堀基光	(サラワク・イバン族の英雄民話圏における象徴と世界観)	藤井文男	(歴史の統辞体系変化の類型学的考察)
川瀬豊子	(古代イランの社会構造に関する研究)	<b>1986年度</b>	
安元直子	(マレー伝統社会のリーダーシップ構造)	大石 周	(南インドの大河川(カウヴェリ=コルルン水系)の経済史)
<b>1982年度</b>		喜多村正	(インドネシアにおける土着文化とイスラーム化)
石上悦郎	(独立インドの国家建設と工業化計画の研究)	駒井利江	(日本語とマレイ語の比較—マレイ語圏における初級日本語学習者の問題点を探る)
川崎有三	(潮洲語の研究)	小林寧子	(インドネシアにおけるイスラム教教育の近代化—20世紀初頭のジャワ島を中心に—)
高谷紀夫	(稲作文化の比較研究)	鳥居秋子	(日本における華僑の実態)
浜畑祐子	(イランの暦法と祭り)	成家克徳	(東南アジアの農民運動と植民地秩序の比較研究)
松村文芳	(漢字の機械処理に関する調査研究)	水田正史	(ペルシア帝国銀行研究)
宮坂敬造	(文化テキストとしてのことわざの比較分析)	吉田 修	(インドの外交政策決定課程に見る世界システムと国益概念の関係)
<b>1983年度</b>			
加藤 栄	(現代ベトナムにおける《Tho' moi》評価)の新しい動向について		





# 言語研修



右：シンハラ語

上：タイ語



アジア・アフリカの言語の習得のための教育訓練は、わが国では開発がおくれている分野ですが、その技術の開発のために、1967年からの7年間ほぼ毎年夏、実験的に、朝鮮語、ベンガル語、現代ヘブライ語、アムハラ語、スワヒリ語、ビルマ語、福建語、チベット語の研修を、それぞれ1言語か2言語ずつ実施しました。1974年からは本格的に行うことになり、当研究所員を中心にその言語を母音とする人、および日本人研究者の協力をえて、東京（2言語）と関西（1言語）で、初級コースを下記のとおり実施してきました。

## 研修言語名（修了者数）

### 東京会場

### 関西会場

#### 年度

1974	朝鮮語(10), チベット語(12)	
1975	カンボジア語(8), ベンガル語(12)	
1976	ペルシア語(10), スワヒリ語(9)	ビルマ語(5)
1977	広東語(14), マラーティー語(6)	モンゴル語(18)
1978	タイ語(12), トルコ語(12)	ペルシア語(13)
1979	ハウサ語(8), ビルマ語(14)	タイ語(7)
1980	ネパール語(14), モンゴル語(14)	ベトナム語(5)
1981	ヒンディー語(8), バシュトー語(10)	中国語中級(26)
1982	アラビア語エジプト方言(12), ハンガリー語(17)	フルフルデ語(12)
1983	チベット語(12), フィンランド語(21)	パンジャブ語(8)
1984	ピリピノ語(タガログ語) (12), ヨルバ語(3)	トルコ語(15)
1985	朝鮮語(14), カンボジア語(10)	スワヒリ語(8)
1986	西南官話(5), タミル語(12)	ベンガル語(8)
1987	中原官話(10), タイ語(19)	シンハラ語(8)
1988	ペルシア語, トルコ語	インドネシア語

研修生（各言語約10名）は、大学など研究機関を通じて全国から公募します。受講を認められた者は入所料、受講料を納付することになります。また、全課程を終えた人には審査のうえ修了証書が授与されます。

各コースの研修時間は1980年度までは226時間でしたが、1981年度以降は150時間で実施しています。なお電算機補助による研修プログラム（CAI）の作成について現在具体的な研究と作業が進められています。

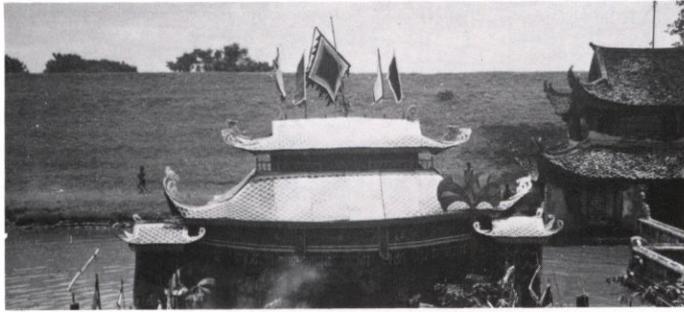
# 海外学術調査

本研究所は、その性格上、アジア・アフリカの現地調査を行うことが重要な機能のひとつとなっています。これまでに当研究所の所員によって組織された海外学術調査は以下の通りです。

なお( )内は研究代表者です。

- (1) アフリカ部族社会の比較調査  
1969年, 1971年 (富川盛道), 1974年, 1976年 (日野舜也)
- (2) ヨーロッパ東南部農村調査  
1970年 (岡 正雄)
- (3) 東南アジア・ナショナリズムの形成過程における地域社会の変動  
1972年 (河部利夫)
- (4) イスラム圏社会・文化変容の比較調査  
1974年, 1977年, 1980年 (三木 亘)
- (5) 中国・インド文明接触地帯における自然, 生態と文化に関する調査  
1975年 (飯島 茂)
- (6) 南アジア河川流域米作地帯の農村社会の研究  
1979年, 1981年, 1983年, 1985年 (原 忠彦)
- (7) ネパールにおける国民形成過程の人類学的言語学的調査  
——ガンダキ水系諸地域住民のネパール化に関する比較研究——  
1980年, 1982年, 1984年 (北村 甫)
- (8) スーダン・サーヘル地帯における移住と地域形成の調査研究  
——ハウサ・フラニ語圏を中心に——  
1981年, 1982年, 1984年 (富川盛道)
- (9) 環カリブ海地域における複合文化の比較研究  
——アフリカ・アジア系社会・文化空間の変動過程——  
1982年, 1983年, 1985年 (山口昌男)
- (10) アラビア海・東地中海交流圏におけるイスラム基層文化の調査研究  
1983年, 1984年 (三木 亘), 1986年 (上岡弘二)
- (11) バントゥ諸語の調査・分析と比較研究  
1984年, 1985年, 1987年 (湯川恭敏)
- (12) ニジェール川大湾曲部諸文化の生態学的基盤及び共生関係の文化人類学的研究  
1986年, 1988年 (川田順造)
- (13) アフリカにおける都市化の総合比較調査  
1986年, 1987年 (日野舜也)
- (14) 南アジア諸言語の調査研究とそのデータベースの作成  
1987年, 1988年 (奈良 毅)

## 助手等の現地投入



ベトナムの水人形劇の上演風景。  
(1986年7月ハノイ近郊にて撮影)  
栗原浩英

アジア・アフリカの言語を自由に話し、読み、書くことができ、かつ、生活を通じてその文化を吸収した研究者を養成するために、本研究所は助手等の若い研究者を、それぞれ2年の期間、アジア・アフリカの諸国に送っています。この計画は1967年から実施され、現在までに合計20名が派遣され、そのうち2名は目下現地で研修中です。

- 1967年—1969年 石垣幸雄 (エチオピア地区)、守野庸雄 (タンザニア地区)
- 1969年—1971年 松下周二 (ナイジェリア地区)、家島彦一 (アラブ連合地区)
- 1971年—1973年 内藤雅雄 (インド地区)、中野暁雄 (モロッコ地区)
- 1973年—1975年 福井勝義 (ソマリア地区)、中嶋幹起 (香港地区)
- 1975年—1977年 加賀谷良平 (ボツワナ地区)、湯川恭敏 (タンザニア、ザイール地区)
- 1977年—1979年 石井 溥 (ネパール地区)、藪 司郎 (ビルマ地区)
- 1979年—1981年 羽田亨一 (イラン、トルコ地区)、清水宏祐 (アラブ連合、イラン、トルコ地区)
- 1981年—1983年 山本勇次 (ネパール地区)、新谷忠彦 (ニューカレドニア地区)
- 1983年—1985年 辻 伸久 (中国、香港地区)、水島 司 (インド地区)
- 1985年—1987年 中見立夫 (中国、モンゴル地区)、梶 茂樹 (ザイール、ケニア、ザンビア地区)
- 1987年—1989年 松村一登 (フィンランド、ソ連地区)、宮崎恒二 (オランダ、インドネシア地区)



何の変哲もない木製人形を棒一本で操作するだけだが、人形は水に浮かぶやいなや木製とは思えないほど柔軟な動きを展開する。農民の娯楽から発展したといわれ、まさに濁った水の生んだ珠玉の芸術である。

(1986年7月ハノイ近郊にて撮影)  
栗原浩英

## 外国人研究員

研究所は、その共同利用研究活動の一環として、外国のアジア・アフリカの言語文化研究の専門家を外国人研究員として受け入れ、研究上の便宜を供与します。現在まで受け入れた外国人研究員は以下の通りです。

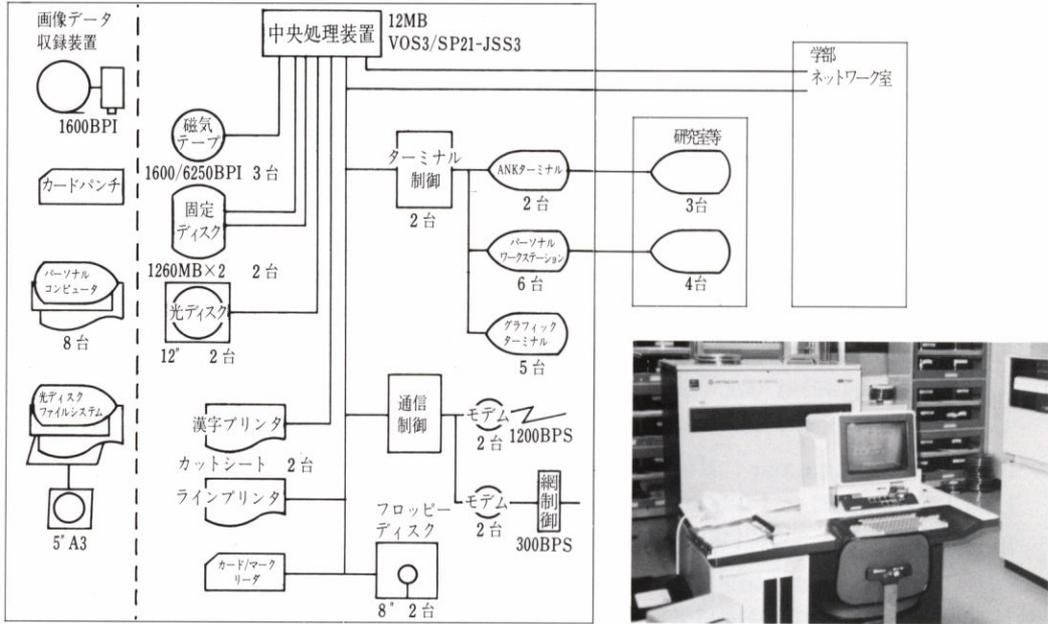
- Gordon T. Bowles：アメリカ・人類学 1967. 10. 6～1968. 9. 15  
Muhammad Aḥmad Anīs：エジプト・近代史 1968. 10. 2～12. 25  
Raouf 'Abbās Hāmid：エジプト・近代史 1973. 4. 1～9. 19  
Yellava Subbarayalu：インド・南インド中世史 1973. 10. 1～1975. 10. 31  
Fe Aldave-Yap：フィリピン・フィリピン国語学 1975. 9. 20～12. 21  
金 完 鎮：大韓民国・韓国語学 1975. 8. 20～1976. 7. 31  
Curtis D. McFarland：アメリカ・言語学  
1976. 2. 20～1977. 2. 19, 1979. 10. 1～1980. 9. 30  
'Abd al-Rahīm 'Abd al-Rahman 'Abd al-Rahim：エジプト・  
中東近代経済史, アラビア語学 1976. 6. 6～10. 4  
Salim Abdulla Wazir：タンザニア・教育学 1976. 6. 4～10. 11  
Bhakti Prasad Mallik：インド・言語学 1976. 7. 13～12. 20, 1985. 9. 30～1986. 9. 29  
Karthigesu Indrapala：スリランカ・歴史学 1976. 11. 1～1977. 3. 31  
俞 昌 均：大韓民国・韓国語学 1977. 4. 1～1978. 1. 31  
Søren C. Egerod：デンマーク・東洋言語学, 古典学 1977. 9. 1～1978. 5. 31  
Bozkurt Güvenç：トルコ・社会人類学 1978. 5. 17～10. 31, 1980. 10. 1～1981. 9. 30  
Thubten Jigme Norbu：アメリカ・チベット学 1978. 6. 27～1979. 3. 31  
André-Georges Haudricourt：フランス・言語学, 植物学, 民族学 1978. 10. 2～10. 31  
Maria Lourdes S. Bautista：フィリピン・言語学 1978. 10. 23～1979. 5. 12  
William S-Y. Wang：アメリカ・言語学, 音声学, 神経言語学 1979. 2. 15～7. 14  
Alhaji Faruk Gezawa：ナイジェリア・ハウサ語学 1979. 4. 12～12. 17  
Shyamsunder Joshi：インド・ヒンディー文学 1979. 5. 26～8. 25  
Dor Bahadur Bista：ネパール・社会人類学  
1979. 5. 30～6. 20, 1983. 5. 27～1984. 5. 26  
Jean-Baptiste Bunkungu：オートボルタ・モシ語学 1979. 6. 1～9. 26  
Paul M. Thompson：アメリカ・中国哲学, 中国文学 1979. 9. 16～1980. 9. 15  
Chandra Mudaliar：インド・国際関係論, 政治学 1979. 10. 1～1980. 9. 30  
Udom Warotamasikkhadit：タイ・言語学 1979. 11. 6～11. 28  
Thomas Sebeok：アメリカ・言語学, 記号学 1980. 4. 13～4. 27  
傅 懋 勳：中国・言語学, 記号学 1980. 6. 11～1981. 3. 10  
Samuel H. Elbert：アメリカ・ポリネシア諸語 1980. 10. 1～1981. 1. 31  
Kripal C. Yadav：インド・歴史学 1980. 10. 1～1981. 9. 30  
Alain Peyraube：フランス・中国言語学 1980. 10. 11～12. 10  
徐 在 克：大韓民国・韓国語学 1981. 5. 25～1982. 3. 15  
Muhammad B. Mkelle：タンザニア・スワヒリ語学 1981. 6. 19～12. 18  
Maurice Coyaud：フランス・中国言語学 1981. 7. 1～7. 31  
William O. Beeman：アメリカ・人類学 1981. 9. 1～1982. 8. 31

- Marie-Claude Paris : フランス・中国言語学 1981. 9. 12~10. 12
- Talat Tekin : トルコ・古代トルコ語 1981. 9. 14~1982. 1. 11
- P. A. Narasimha Murthy : インド・政治学, 国際関係論 1981. 10. 1~1982. 9. 30
- Yoshiro Imaeda : フランス・チベット学 1981. 10. 1~1982. 1. 16
- Ernesto Constantino : フィリピン・フィリピン言語学 1981. 11. 1~1982. 10. 31
- Suresh Awasthi : インド・民俗演劇 1982. 2. 1. ~1983. 1. 31
- Salah A. El-Araby : エジプト・アラビア語視聴覚教育学 1982. 2. 1~1983. 1. 31
- Kiruja Ruchiami : ケニア・ケニア国大統領府学術研究部主任 1982. 5. 1~5. 31
- Mohammadou Aliou : カメルーン・フラ言語学 1982. 6. 1~9. 10
- John G. Hangin : アメリカ・モンゴル言語学 1982. 9. 1~1983. 8. 31
- Isidore Dyen : アメリカ・オーストロネシア比較言語学 1982. 8. 25~1983. 8. 24
- Suriya Ratanakul : タイ・東南アジア諸言語, 言語学 1982. 8. 28~9. 11
- Tuncer Baykara : トルコ・歴史学 1982. 10. 25~1983. 1. 24
- Kanchana Ngourngsi : タイ・言語学 1982. 12. 10~12. 23
- Elmar A. Hostenstein : スイス・普遍人類学 1983. 3. 1~1984. 2. 29
- 南 豊鉉 : 大韓民国・韓国語学 1983. 8. 11~1984. 8. 10
- Alexis Rygaloff : フランス・中国言語学, 東アジア言語学 1983. 10. 1~1984. 9. 30
- Adel Abdulsalam : シリア・自然地理学, チェルケス語 1983. 10. 21~1984. 10. 20
- Sechin Jagchid : アメリカ・モンゴル史 1983. 9. 1~1984. 8. 31
- Santasilan Kadirgamar : スリランカ・国際関係論 1983. 11. 1~1984. 8. 13
- Lilia F. Antonio : フィリピン・フィリピン, フィリピン翻訳学 1984. 3. 15~1984. 9. 14
- Rajagopalan Venkataratnam : インド・医療社会学 1984. 6. 4~1985. 6. 3
- Dattatreya N. Dhanagare : インド・社会学 1984. 9. 1~12. 31
- 朴 熙泰 : 大韓民国・日本語学 1984. 9. 1~1985. 8. 31
- Ram Adhar Singh : インド・言語学 1984. 10. 1~1985. 9. 30
- Barbara N. Aziz : アメリカ・社会人類学 1984. 10. 16~1985. 10. 15
- Guillermo E. Quartucci : メキシコ・日本文学 1984. 11. 26~1985. 9. 27
- 黄 国営 : 中華人民共和国・言語学 1985. 2. 5~12. 4
- Pradyumna P. Karan : アメリカ・人文地理学 1985. 10. 1~1986. 9. 30
- 馬 真 : 中華人民共和国・中国言語学 1985. 10. 1~1986. 9. 30
- Metin And : トルコ・演劇学 1986. 3. 1~1986. 5. 31
- 韓 美卿 : 大韓民国・日本語学 1986. 4. 1~1987. 1. 31
- Mya Mya : ビルマ・歴史学 1985. 10. 1~1986. 5. 11
- Shanmugam Pillai Subbiah : インド・農村地理学, 社会地理学 1986. 8. 21~1987. 4. 20
- Ahmet Mete Tuncoku : トルコ・国際関係論 1986. 10. 1~1987. 9. 30
- 李 榮 : 中華人民共和国・中国音韻論, 方言学 1986. 12. 1~1987. 9. 30
- James Francis Downs : アメリカ・文化人類学 1986. 10. 1~1987. 9. 30
- 賀 巍 : 中華人民共和国・中国語方言学 1987. 3. 1~8. 31
- Kyaw Win : ビルマ, 歴史学 1987. 6. 28~1988. 6. 27
- Raouf A. Hamed : エジプト・歴史学 1987. 7. 11~9. 10
- Virgilio G. Enriquez : フィリピン・社会心理学, 言語心理学 1987. 10. 1~1988. 9. 30
- Saroj K. Chaudhuri : インド・日本語, 日本文化 1987. 10. 1~1988. 9. 30
- John H. Fincher : アメリカ・中国現代史 1987. 10. 1~1988. 9. 30

# 施設

## 電 算 機 室

システム構成図



当研究所では、1978年1月から、HITAC M-150システムを導入し、現在は HITAC M-240Dシステムが稼働しています。内部メモリー12MB、ディスク容量5GB、12インチ光ディスク2ドライブ、磁気テープ3デッキ、フロッピーディスク2ドライブがあります。入力にはパンチ/マークカード、TSS端末、パーソナルコンピュータが使えます。出力のためにはラインプリンタの他に漢字プリンタが2台ありますが、これを使用して、大きさも形も様々なAA諸言語の文字を印刷できるようなソフトウェアが開発されていて、国内外の研究者に利用されています。

このほかのソフトウェアとしては単語の用例検索システムが準備されています。これはAA諸言語をローマ字や数字におきかえることをせずに、原字のままで入力し、データベース化するもので、必要に応じて何時でも任意の単語(例)の用例を検索し、それぞれの固有の文字で印刷することができます。このシステムは、文法研究や辞典編纂の資料作成ばかりでなく、史料や調査記録の索引を作ることもでき、言語学ばかりでなく、歴史学や文化人類学の研究にも活用できます。

またグラフィック・ディスプレイもあり、AA諸言語の研修の自動化等の開発研究も行われています。

1979年度に導入された画像処理システムは、アジア・アフリカの固有の文字フォント作製に威力を発揮しています。また、1987年度に導入したスタンドアロンの光ディスクファイルシステム HitFiLE 650には、印刷された大量の資料が登録され、随時必要なページを参照できるようになっています。

## 図 書 室

共同利用研究機関としての当研究所は、アジア・アフリカ諸地域の言語・文化の研究に必要な基礎資料を1964年の創設以来毎年購入し、また海外研究機関との図書交換を通じて190誌の定期刊行物、研究書・論文集等を収集しています。図書室の蔵書総冊数は1988年3月末現在で約58,900冊にのぼっています。

蔵書の中には、アジア・アフリカ諸地域の国語教育資料をはじめ、雑誌(約1,400種)、新聞(約60種)、世界各国語の聖書などが含まれていますが、洋雑誌の整備には特に力を入れ、機会あるごとにバックナンバーを購入し、できるだけ完本でそろえるよう努力を続けています。たとえば、19世紀末から1970年までのイランの主要新聞65種がマイクロフィルム化されているほか、19世紀末に創刊されたベンガル語の文芸雑誌のバックナンバーを多数そろえており、又トルコ官報(オスマン帝国及び共和国)が1831年以降ほぼ完全に揃っているなど、他の研究機関には見られぬ資料が所蔵されています。

またラングーン大学より寄贈されたビルマ語の文献資料(1,700冊)をはじめ、東アジア・東南アジア・南アジア・西アジア・中近東・アフリカ・西欧・東欧・ソ連邦・太平洋地域におけるそれぞれの現地語で書かれた資料が数多くあり、当研究所図書室の特色の一つとなっています。また研究所の特色あるコレクションとして、次のような文庫があります。

### ①. 山本文庫(昭和42年受入)

著名な満洲語学者であった故山本謙吾元跡見学園短期大学教授(1920~65)の個人蔵書で、満洲語・ツングース語関係の諸文献を中心に言語学・音声学・アルタイ語学等に關する諸文献(和書・洋書合計598冊)が含まれる。

### ②. 浅井文庫(昭和45年受入)

これは、AA研の元運営委員でありかつ著名なアウストロネシア言語学者であった故浅井恵倫博士(1895~1969)の戦後集められたアジア・アフリカ諸言語の研究書・辞典類(和書・洋書合計191冊、文書18葉)を始め、同博士が台湾より持ち帰られた高砂族に関する貴重な言語資料(図書・ノート・写真類・未完未発表の高砂族伝説集総索引カード等)が含まれている。この写真類の中には、世界的に貴重なキリシタン資料「スピリツアル修行(Spiritual Xuguio)」の原本を写した35ミリフィルムが含まれているが、研究者の便宜を考え現在その複製フィルムは国文学研究資料館に置かれてある。「スピリツアル修行」の原本は、長崎とマドリードに1冊ずつ、世界に僅か2冊しか現存しないという稀観本であるが、戦前には実はもう1冊マニラにあって、俗に「マニラ本」と呼ばれていた。しかしこの「マニラ本」は戦禍により焼失してしまい、浅井博士の撮られた写真を通してしか今はその原形を知り得なくなっている。

### ③. 小林文庫(昭和51年受入)

著名な蒙古史の研究者である小林高四郎元横浜国立大学教授(1905~87)の個人蔵書で、蒙古民族の生活と習俗に関する文献(和書、洋書合計1,671冊)が含まれている。

### ④. 前嶋文庫(昭和60年度受入)

わが国におけるイスラム研究の創立者の一人である前嶋信次元慶応大学教授(1903~83)の個人蔵書のうち、和漢書1,272冊を受入れたもの。イスラム関係のみならず、東洋史、東西交渉史、旅行記など広範な分野にわたる貴重なコレクションである。戦前に刊行され、今では珍らしくなった図書も少なくない。

# 音声学実験室

「ヨルバ語のトーンなんですが、基本周波数の動きは？」

「広東語の声調の上がり下がりを目で見て確かめたいんですが……」

「フラニ語ってどんなことばですか？ 実際に録音したのがありますか？」

「言語研修に使う教材を、良い条件で録音したいんだけど……」

こんな例は、音声学実験室の活動のほんの一部分にすぎません。サウンド・スペクトログラフやピッチ・インディケーターをはじめとした音声分析用機器が、フィールド調査で収集された音声資料の処理にあたっています。

音の性質・特徴やその調音状態を観察し記録するために、次のような分析機器が用意されています。サウンド・スペクトログラフは、音波を周波数分析して、その各時点ごとの音波の構成要素をとりだして特殊用紙上に濃淡模様で表示してくれます。周波数分析には用途に応じてワイドバンドとナローバンドがあります。ワイドバンドでの濃淡模様は各音の長さと共にそれぞれの様々な音色を示してくれ、ナローバンドでは各音の長さと共に音の高低変化を示してくれます。このような分析を通して未知の表現し難い音声を定まった規準のもとで表現可能にしたり、またその調音状態を推測する手助けを与えてくれます。ピッチ・エクストラクターは、音の経過時間にしながら各時点での基本周波数や音の強弱の度合を分析し、ブラウン管面上に表示してくれます。またその管面の表示を特殊紙上にコピーすることもできます。管面表示の最大時間長は10秒ですので、単語の分析のみならず小文のイントネーションの分析もできます。さらに長時間にわたる連続音声の記録のためにフォトコーダーがピッチ・エクストラクターと共に用いられています。フォトコーダーは、極めて詳細な音声データの観察のため、音声波を直接表示・記録することにも用いられています。エレクトロ・パラトグラフは、舌の調音運動を直接に観察し記録するための機器のひとつです。32個の微小な電極を埋めこんだ人工口蓋を発話者の口蓋にはめて、電極と舌との各時点ごとに変化する接触状態を、機械の前面パネルに口蓋状に配列した32個の小ランプの点滅により表示してくれます。また、この点滅表示を特殊用紙に記録することもできます。

このほかに、オープンリールテープ・カセットテープを高速にコピーするテープ・デュプリケーターが、言語研修用テープの作製やフィールド調査などで収集されたテープのコピーのために用意されています。また良好な条件でオリジナルテープを録音するために、防音室や各種のテープレコーダーやマイクロフォンが用意されています。

付属施設の“音声・言語研修資料室”には、フィールド調査で集められた世界のめずらしい言語や貴重な民話・民族音楽などのテープをはじめ、言語研修のテキストやテープ、各種の語学レコード・テープが整理保管され、研究者の利用の便をはかっています。

# 出版物一覽

下記の出版物は非売品ですが、著者あるいは編集出版委員会の承認により、研究機関、個人研究者に寄贈することができます。

なお、\*印のものは在庫がありません。

アジア・アフリカ言語文化研究 *Journal of Asian and African Studies*, Nos. \*1(1968), \*2(1969), \*3(1970), \*4(1971), \*5(1972), \*6(1973), \*7(1974), \*8(1974), \*9(1974), \*10(1975), \*11(1976), \*12(1976), \*13(1977), 14(1977), 15(1978), 16(1978), 17(1979), 18(1979), 19(1980), \*20(1980), \*21(1981), \*22(1981), \*23(1982), 24(1982), \*25(1983), \*26(1983), \*27(1984), 28(1984), 29(1985), \*30(1985), 31(1986), 32(1986), 33(1987), 34(1987), 35(1988).

アジア・アフリカ言語文化研究所 通信, Nos. 1 ~ 62. (1966~1988).

## アジア・アフリカ言語文化叢書

1. ピア・アヌマーン・ラーチャトン著・河部利夫訳註, タイ農民の生活, 1967.
- \*2. 家島彦一訳註, イブン・ファドラーンのヴォルガ・ブルガール旅行記, 1969.
3. MATSUSHITA, S., *An Outline of Gwandara Phonemics and Gwandara-English Vocabulary*, 1972.
4. NAKANO, A., *Conversational Texts in Eastern Neo-Aramaic (Gzira Dialect)*, 1973.
- \*5. TSUCHIDA, S., *Reconstruction of Proto-Tsouic Phonology*, 1976.
- \*6. NAGATA, Y., *Muhsin-Zâde Mehmed Paşa ve Âyânlik Müessesesi*, 1976.
7. YAJIMA, H., *A Chronicle of the Rasûlid Dynasty of Yemen*, 1976.
8. McFARLAND, Curtis D., *A Provisional Classification of Tagalog Verbs*, 1976.
9. McFARLAND, Curtis D., *Northern Philippine Linguistic Geography*, 1977.
10. HASHIMOTO, M. J., *Phonology of Ancient Chinese*, Vol. 1, 1978.
11. HASHIMOTO, M. J., *Phonology of Ancient Chinese*, Vol. 2, 1979.
12. KAWADA, J., *Genèse et évolution du système politique des Mosi méridionaux (Haute Volta)*, 1979.
13. BAUTISTA, Maria L., *Patterns of Speaking in Pilipino Radio Dramas: A Sociolinguistic Analysis*, 1979.
14. 石井 溥, ネワール村落の社会構造とその変化——カースト社会の変容——, 1980.
15. McFARLAND, Curtis D., *A Linguistic Atlas of the Philippines*, 1980.
16. YADAV, Kripal C., *Elections in Panjab: 1920-1947*, 1981.
17. EL-ARABY, Salah A., *Teaching Foreign Languages to Arab Learners - Methods and Media-*, 1983.
18. KAWADA, J., *Textes historiques oraux des Mosi méridionaux (Burkina-Faso)*, 1985.
- \*19. MIZUSHIMA, T., *Nattar and the Socio-Economic Change in South India in the 18th-19th Centuries*, 1986.
20. 中嶋幹起, 湘方言調査報告 上冊, 1987.
21. TUNCOKU, A. M., *Japonya' nin çin Halk Cumhuriyeti'ne Karsi Politikasi*, (1952~1978)
22. BALLARD, W. L., *The History and Development of Tonal Systems and Tone Alternations in South China*, 1988.

## アジア・アフリカ基礎語彙集

1. 山本謙吾, 満洲語口語基礎語彙集, 1969.
- \*2. 梅田博之, 現代朝鮮語基礎語彙集, 1971.
- \*3. 橋本萬太郎, 客家語基礎語彙集, 1972.
4. 和田正平, イラク語基礎語彙集, 1973.
5. 石垣幸雄, エチオピア比較語句集, 1974.
6. 守野庸雄, スワヒリ語基礎語彙用例集, 1975.
7. 坂本恭章, モン語語彙集, 1976.
8. 中嶋幹起, 閩語東山島方言基礎語彙集, 1977.
9. 奈良 毅, *Avahattha and Comparative Vocabulary of New Indo-Aryan Languages*, 1979.
10. 中嶋幹起, 福建漢語方言基礎語彙集, 1979.
11. 橋本萬太郎, ベエ語語彙集, 1980.
12. 新谷忠彦, ラテ語-ベトナム語-日本語語彙, 1981.
13. 藪 司郎, アツィ語基礎語彙集, 1981.
14. 中嶋幹起, 浙南吳語基礎語彙集, 1983.
15. 湯川恭敏, サンバー語語彙集, 1984.
16. 梶 茂樹, *Lexique Tembo I: Tembo-Swahili du Zaïre-Japonais-Français*, 1986.
17. 辻 伸久, 湖南省南部中国語方言語彙集, 1987.
18. 橋本萬太郎, 納西語料, 1988.

## 外国人研究者出版物

1. CONSTANTINO, E., *Isinay. Texts and Translation*, 1982.
2. EL-ARABY, Salah A., *Intermediate Egyptian Arabic—An Integrative Approach*, 1983.
3. 札奇斯欽, 我所知道的德王和當時的內蒙古(一), 1985.
4. 馬 真 他, 西南官話基本文型的記述, 1986.
5. DOWNS, J. F., *Tibetan Pilgrimage*, 1987.
6. 李榮, 渡江書十五音, 1987.
7. 賀巍, 三又語方言文稿集, 1987.

## 共同研究報告

1. アジア・アフリカ諸国における国語教育資料の調査研究——中間報告, 1966.  
アジア・アフリカ諸国——国語教育資料目録, 1967.
2. アジア・アフリカ言語調査票, 上(1966), 下(1967),
3. 「イスラム化」に関する共同研究報告, Nos. \*1(1968), \*2(1969), \*3(1970), 4(1971), 5(1972), \*6(1973), 7(1972), 8・9(1986).
4. 現代インド・パキスタン文学共同研究報告, Nos. 1(1970), 2(1971), 3(1972).
- \*5. アジア・アフリカにおける宗教運動共同研究報告, Nos. \*1(1972), \*2(1972), \*3(1973).
6. アジア・アフリカ文法研究, Nos. \*1(1972), 2(1973), 3(1974), 4(1975), 5(1976), 6(1977), 7(1978), 8(1979), 9(1980), 10(1981), 11(1982), 12(1983), 13(1984), 14(1985), 15(1986), 16(1987)
7. *Asian and African Grammatical Manual* (アジア・アフリカ文法便覧), 1972～:
 

No. *11. Korean (梅田博之), 1973. 11z. Ainu (村崎恭子), 1978. *12b. Fukienese (中嶋幹起) *12z. Tibetan (北村 甫), 1977. 13. Indo-Aryan (石垣幸雄), 1980. 13a. Hindi (溝上富夫), 1980. *13b. Marathi (内藤雅雄), 1976. 13c. Bengali (奈良 毅), 1979. 13d. Khaling (鳥羽季義), 1979, 1984. 13e. Panjabi (溝上富夫), 1981. 13x. Tamil (徳永宗雄), 1981. 13y. Malayalam (伊藤正二), 1978. *14a. Cambodian (坂本恭章), 1974. *14b. Burmese (藪 司郎), 1974. 14c. Thai (森 幹男), 1975, 1984. 15b. Philippine (山田幸宏, 土田 滋), 1975, 1983. *16b. Samoan (小田真弘), 1977.	*17. Persian (上岡弘二), 1976. 17b. Baluchi (縄田鉄男), 1981. 17m. Mazandarani (縄田鉄男), 1984. 17p. Parachi (縄田鉄男), 1983. 17s. Shughni (縄田鉄男), 1980. *20. African (石垣幸雄), 1975. *21. Swahili (守野庸雄), 1976. *22a. Cushitic (石垣幸雄), 1972. 22b. Ethiopic (石垣幸雄), 1978. *23. Hausa (松下周二), 1974. *26. Fulfulde (江口一久), 1974. 33. Romance & Greek (石垣幸雄), 1973. 33y. Basque (石垣幸雄), 1979. 33z. Maltese (石垣幸雄), 1977. 34a. Albanian (石垣幸雄), 1979. 36. Uralic etc. (石垣幸雄), 1976. 40. USSR Major (石垣幸雄), 1980.
---	--
8. アフリカ部族社会の比較研究: 1. アフリカ部族社会の特質をめぐって(1971), \*2. アフリカ社会の地域性(1973).
- \*9. トルコ民族とイスラムに関する共同研究報告, 1 (1974).
10. アジア・アフリカ語の計数研究, \*1(1975), \*2(1975), \*3(1976), \*4(鄒 嘉彦, 老乞大諺解単字索引, 1976), \*5(坂本恭章, カンボジア語小辞典, 1976), \*6(1976), \*7(1977), \*8(1978), \*9(1978), \*10(1979), \*11(1979), \*12(YUE, Anne O., *The Teng-xian Dialect of Chinese*, 1979), \*13(1980), \*14(藍清漢, 中国語宜蘭方言語彙集, 1980), 15(SHERARD, Michael, *A Synchronic Phonology of Modern Colloquial Shanghai*, 1980), 16(1981), \*17(傅懋勣, 納西族图画文字《白蝙蝠取經記》研究<上冊>, 1981), 18(徐琳・木玉璋, 僂僂族《創世記》研究, 1981), 19(1982), 20(SHERARD, Michael, *A Lexical Survey of the Shanghai Dialect*, 1982), 21(1983), \*22(1984), 23(傅懋勣, 納西族图画文字《白蝙蝠取經記》研究<下冊>, 1984), 24(1985), 25(ポール K. ベネディクト, 突破口: 東南アジアの言語から日本語へ——日の神の民の起源, 1985), 26(1986), \*27(徐琳, 白族《黄氏女対経》研究, 1986), 28(1987), 29(徐琳, 白族《黄氏女対経》研究<続>, 1988), 30(1988).

11. *Oceanic Studies*, No. 1 (1976).
- \*12. インド・パキスタン分離独立の史的研究 資料集 \*1(1976), \*2(1977).
13. 南アジアの大河流域における農村社会の研究：南アジア農村社会の研究, 1(1977), 2(1978), 3(1979), 4(1979), 5(1980), 6(1985), 7(1987), 8(1987).
14. ヒマラヤ・チベットの生態・言語・文化に関する総合研究：YAK, \*1(1977), 2(1978), 3(1979), 4(1980), 5(1981), 6(1982), 7(1983), 8(1988).
15. アフリカ社会の形成と展開—地域・都市・言語 (1980).
16. 日本の言語文化研究リプリント・シリーズ, Nos. 1(飯島 茂, 日本からみた “Thailand: A Loosely Structured Social System”, 1981), 2(岡田英弘, 中国のなかの日本, 1982).
17. *Phraseological Questionnaire*, Vol. 1 No. 1~2. (*Aquatic Idiomatics*, 1982), Vol. 3 No. 1 (*Proverbial*, 1981).
18. *Performance in Culture*, No. 1 (BEEMAN, William O., *Culture, Performance and Communication in Iran*, 1982), \*No. 2 (AWASTHI, Suresh: *Drama: The Gift of Gods-culture, Performance and Communication in India*, 1983), \*No. 3 (NAGASHIMA, Y.S., *Rastafarian Music in Contemporary Jamaica - A Study of Socioreligious Music of the Rastafarian Movement in Jamaica*, 1984), No. 4 (METIN, AND., *Culture, Performance and Communication in Turkey*, 1987).
19. *Nationalism in Asia and Its International Relations*, No. 1 (*Transformation and Peasant Movements in Contemporary Asia*, 1985), No. 2 (アジア政治の展開と国際関係, 1986).
20. 象徴と世界観研究叢書, No. 1 (高知尾仁, 球体遊戯, 1986), No. 2 (橋本裕之, 春日若宮おん祭と奈良のコスモロジー, 1986).
21. *Bantu Linguistics*, No. 1 (1987).
22. 南アジアにおける社会集団形成過程に関する比較研究, No. 1 (柳沢 悠, 水島 司, 20世紀初め南インドにおけるカーストと土地保有構造の変動, 1988).
23. 第三世界の 대중文化の研究, 1 (原 忠彦, インド・マンガの世界観序論, 1988).

## African Languages and Ethnography

- EGUCHI, P. K., *Miscellany of Maroua Fulfulde (Northern Cameroun)*, 1974.
- MATSUSHITA, S., *A Comparative Vocabulary of Gwandara Dialects*, 1976.
3. MOHAMMADOU, E., *L'Histoire des Peuls Férôœ du Diamaré: Maroua et Pétte*, 1976.
  4. EGUCHI, P. K., (tr.), *Shi'r al-Tûba (Poem of Repentance)*, 1976.
  5. WADA, S., *Hadithi za Mapokeo ya Wairaqw (Iraqw folktales in Tanzania)*, 1976.
  6. NAKANO, A., *Dialogues in Moroccan Shilha (Dialects of Anti-Atlas and Ait-Warain)*, 1976.
  7. TANAKA, J., *A San Vocabulary of the Central Kalahari-G//ana and G//wi Dialects*, 1978.
  8. MOHAMMADOU, E., *Les Royaumes Foulœ du Plateau de L'Adamaoua au XIX siècle*, 1978.
  9. MATSUSHITA, S., *In a Small Town on the Benue—Fula Texts from Gongola State, Northern Nigeria*, 1978.
  10. HINO, S., *The Classified Vocabulary of the Mbum Language in Mbang Mboum—with Ethnographical Descriptions*, 1978.
  11. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon I*, 1978.
  12. MOHAMMADOU, E., *Catalogue des Archives Coloniales Allemands du Cameroun*, 1978.
  13. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon II*, 1980.
  14. MOHAMMADOU, E., *Le Royaume du Wandala ou Mandara au XIXe Siecle*, 1982.
  15. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon III*, 1982.
  16. NAKANO, A., *A Vocabulary of Beni Amer Dialect of Tigré*, 1982.
  17. MOHAMMADOU, E., *Peuples et Royaumes du Foubina*, 1983.
  18. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon IV*, 1984.
  19. KAJI, S., *Deux Mille Phrases de Swahili Tel Qu'il Se Parle au Zaïre*, 1985.
  20. MOHAMMADOU, E., *Traditions D'Origine des Peuples du Centre et de L'Ouest du Cameroun*, 1986.
  21. EGUCHI, P. K., *An English-Fulfulde Dictionary*, 1986.
  22. MOHAMMADOU, E., *Lamidats du Diamare et du Mayo-Louti au XIXe Siecle*, 1988.

## Studia Culturae Islamicae

1. NAKANO, A., *Basic Vocabulary in Standard Somali (I)*, 1976.
2. MIKI, W., *Index of the Arab Herbalist's Materials*, 1976.
3. YAJIMA, H., *The Arab Dhow Trade in the Indian Ocean*, 1976.
4. NAGATA, Y., *Some Documents on the Big Farms (Çiftlik) of the Notables in Western Anatolia*, 1976.
5. MIYAJI, K., "Kacem Ali"—*Monographie d'un domaine autogéré de la plaine de Mitidja (Algérie)*, 1976.
6. MIYAJI, M., *L'Emigration et le changement socio-culturel d'un village Kabyle (Algérie)*, 1976.
7. MIKI, W., & 'Abd al-Rahim., *Village in Ottoman Egypt and Tokugawa Japan—A Comparative Study*, 1977.
8. MIKI, W., HONDA G. & M. Salah Ahmed, *Herb Drugs and Herbalists in the Middle East*, 1979.
9. 上岡弘二, 家島彦一, インド洋西海域における地域間交流の構造と機能—ダウ調査報告2—, 1979.
10. KAMIOKA, K., & YAMADA, M., *Lārestāni Studies I. Lāri Basic Vocabulary*, 1979.
11. NAGATA, Y., *Materials on the Bosnian Notables*, 1979.
12. SHIMIZU, K., *Bibliography on Saljuq Studies*, 1979.
13. HANEDA, K., *Tabrizi Vocabulary an Azeri-Turkish Dialect in Iran*, 1979.
14. NAKANO, A., *Report on Moroccan Urban and Rural Life 1—Ethnographic Texts in Moroccan Arabic*, 1979.
15. TSUGE, Y., *Ethnographical Texts in Amharic (1)*, 1982.
16. YAJIMA, H., *The Islamic History of the Maldive Islands by Hasan Taj al-Dīn's (D. 1139 A.H. / 1727 A. D.)*, Vol. 1 (Arabic Text), Ed. & Notes, 1982.
17. NAKANO, A., *Somali Folktales (1)—Texts in Somali [1]—*, 1982.
18. NAKANO, A., *Folktales of Lower Egypt (1)—Texts in Egyptian Arabic [1]—*, 1982.
19. MIKI, W., *Herb Drugs and Herbalists in the Maghrib*, 1982.
20. YAMAGATA, T., *Coptic Monasteries at Wadi al Natrun in Egypt—From the Field Notes on the Coptic Monks' Life—*, 1983.
21. BAYKARA, T., *Yatağan—Her Şeyi ile 'Tarihi Yaşatma Denemesi'—*, 1984.
22. YAJIMA, H., *The Islamic History of the Maldive Islands by Hasan Tāj al-Dīn's, Vol. 2, Annotations and Indices*, 1984.
23. NAGHIZADEH, M., *The Role of Farmer's Self-Determination Collective Action and Cooperatives in Agricultural Development—A Case Study of Iran*, 1984.
24. ABDULSALAM, A., *The Rural Geographical Environment of the Syrian Coastal Region and the Shizuoka Region—A Comparative Study of Syria and Japan*, 1985.
25. ABDULSALAM, A., *Adighean (Western Circassian) Vocabulary*, 1985.
26. TSUGE, Y., *Ethnographical Texts in Amharic (2)*, 1985.
27. MIKI, W., *Herb Drugs and Herbalists in Turkey*, 1986.
28. MIKI, W., *Herb Drugs and Herbalists in Pakistan*, 1986.
29. NAKANO, A., *Comparative Vocabulary of Southern Arabic (Mahri, Gibbali and Soqotri)*, 1986.
30. KAMIOKA, K., RAHBAR, A. & HAMIDI, A. A., *Comparative Basic Vocabulary of Khonji and Lari—Lārestāni Studies 2—*, 1986.
31. YAJIMA, H., *Arwād Island—A Case Study of Maritime Culture in the Cyrian Coast*, 1986.
32. TAKEISHITA, M. & Ibn 'Arabi's, *Theory of the Perfect Man and Its Place in the History of Islamic Thought*, 1987.
33. HAYASHI, T., *A Turkish Dialect in North-Western Anatolia-Bolu Dialect Materials-*, 1988.
34. PARSINEJAD, I., *Mirza Fath Ali Akhundzadeh And Literary Criticism*, 1988.
35. SATO, T., *The Syrian Coastal Town of Jabala—Its History and Present Situation—*, 1988.
36. YAJIMA, H. and KAMIOKA, K., *Caravan Routes Across the Zagros Mountains—Maymand Route—*, 1988.
37. KAMIOKA, K. and HANEDA, K., *Periodic Markets in Gilan*, 1988.

## Monumenta Serindica

1. IJIMA, S. (ed.), *Changing Aspects of Modern Nepal—Relating to the Ecology, Agriculture and Her People*, 1977.
2. HASHIMOTO, M. (compl.), *The Newari Language—A Classified Lexicon of its Bhadgaon Dialect*, 1977.
3. KITAMURA, H. (ed.), *Glo Skad—A Material of a Tibetan Dialect in the Nepal Himalayas*, 1977.
4. MATISOFF, J. A., *Mpi and Lolo-Burmese Microlinguistics*, 1978.
5. HOSHI, M. & Tondup Tsering, *Zangskar Vocabulary—A Tibetan Dialect Spoken in Kashmir*, 1978.
6. KITAMURA, H., NISHIDA, T. & NISHI, Y. (ed.), *Tibeto-Burman Studies 1*, 1979.
7. NAGANO, Y., *Amdo Sherpa Dialect—A Material for Tibetan Dialectology*, 1980.
8. NISHIDA, T., *The Structure of the Hsi-hisa (Tangut) Characters*, 1980.
9. THURGOOD, G., *Notes on the Origins of Burmese Creaky Tone*, 1981.
10. BISTA, D. B., IJIMA, S., ISHII, H., NAGANO, Y. & NISHI, Y., 1982. *Anthropological and Linguistic Studies of the Gandaki Area in Nepal*, 1982.
11. KARAN, P. P., PAUER, G., & IJIMA, S., *Map—The Kingdom of Nepal*, 1983.
12. TACHIKAWA, M., MIKAME, K., HOSHI, M., NAGANO, Y., *Anthropological and Linguistic Studies of the Gandaki Area in Nepal. II*, 1984.
13. KARAN, P. P., PAUER, G., & IJIMA, S., *Sikkim Himalaya Development in Mountain Environment*, 1984.
14. MALLA, K. P., *The Newari Language; A Working Outline*, 1985.
15. ISHII, H., TACHIKAWA, M., NAKAZAWA, S., NAGANO, Y., HOSHI, M., *Anthropological and Linguistic Studies of the Kathmandu Valley and the Gandaki Area in Nepal*, 1986, SHARMA, P. R., 三瓶清朝, 山本勇次, ネパールにおける言語・文化・社会の動態, 1986.
16. SUN, J. T.-S., *Aspects of the Phonology of Amdo Tibetan: Ndzorge Śæme Xæra Dialect*, 1986.
17. KARAN, P. P., PAUER, G. & IJIMA, S., *Butan: Development amid Environmental and Cultural Preservation*, 1987.
18. EINO, S., *Die Cāturmāsya Odea Die Altindischen Tertialop fer Dargestellt nach Pen Vorschriften Der Brāhmaṇas und Der Srau tasatras*, 1988.

## Studies in Socio-cultural Change in Rural Villages in India

1. KARASHIMA, N., SUBBARAYALU, Y. & SHANMUGAM, P., *Land Control and Social Change in the Lower Kaveri Valley from the 12th Centuries*, 1980.
2. HARA, T. & KOMOGUCHI, Y., *Socio-Economic Studies of Two Villages Esnakorai and Perwalanallur, Lalgudi Taluk*, 1981.
3. 柳沢 悠, 南インド・カーヴェリ河流域の農村社会の史の変容——アバドウライ村の土地所有関係を中心にして——, 1981.
4. SUBBIAH, S., MIZUSHIMA, T., & NARA, T., *Socio-Economic Studies of Two Villages; Mahizambadi and Naykulam, Lalgudi Taluk*, 1981.
5. NAKAMURA, H., *Disintegration and Re-integration of a Rural Society in the Process of Economic Development—The Second Survey of a Tank-based Village in Tamil Nadu—*, 1982.

## Socio-cultural Change in Villages in India

1. KARASHIMA, N., *Pre-modern Period*, 1983.
2. *Modern Period*, No. 1 (HARA, T., MIZUSHIMA, T. & NAKAMURA, H.), No. 2 (KOMOGUCHI, Y. & YANAGISAWA, H.), 1983, No. 3 (KOMOGUCHI, Y.), 1984.

## Sudan Sahel Studies

1. TOMIKAWA, M. (ed.), 1984.
2. TOMIKAWA, M. (ed.), 1986.

## AA-Ken Caribbean Study Series

1. YAMAGUCHI, M. & NAITO, M. (ed.), *Comparative Studies on the Plural Societies in the Caribbean*, 1985.
2. VERNON, D., *Money Magic in a Modernizing Maroon Society*, 1985.
3. YAMAGUCHI, M. & NAITO, M. (ed.), *Social and Festive Space in the Caribbean: Comparative Studies on the Plural Societies in the Caribbean, Vol. 2*, 1987.

## Studies in Socio-cultural Change in Rural Villages in Bangladesh

1. HARA, T., & UMITSU, M., 1985.
2. FAROUK, A., 1985.
3. TANIGUCHI, S., & SATO, H., 1985.
4. ISLAM, S., 1985.
5. CHOWDHURI, A., 1987.
6. TANIGUCHI, S., 1987.
7. SATOH, T., & UMITSU, M., 1987.
8. FAROUK, A., 1987.

## Bantu Vocabulary Series

1. YUKAWA, Y., *A Classified Vocabulary of the Mwenyi Language*, 1987.
2. YUKAWA, Y., *A Classified Vocabulary of the Nkoya Language*, 1987.
3. KAGAYA, R., *A Classified Vocabulary of the Lungu Language*, 1987.
4. KAGAYA, R., *A Classified Vocabulary of the Lenje Language*, 1987.

## South Asian Monograph

1. KAWAI, A., *'Landlords' and Imperial Rule: Change in Bengal Agrarian Society C 1885-1940*, Volume 1, 1986, Volume 2, 1987.
2. 水島 司, 南インド在地社会の研究, 1987.

## 言語研修テキスト

- \*1. チベット語, 北村甫ほか編, 全5冊(1974).
- \*2. 朝鮮語, 梅田博之ほか編, 全3冊(1974).
- \*3. カンボジア語, 坂本恭章ほか編, 全5冊(1975).
- \*4. ベンガル語, 奈良 毅編, 1冊(1975).
- \*5. ビルマ語, 大野 徹ほか編, 全5冊(1976).
- \*6. ペルシア語, 上岡弘二ほか編, 全3冊(1976).
- \*7. スワヒリ語, 守野庸雄ほか編, 全2冊(1976).
- \*8. 広東語, 中嶋幹起ほか編, 全4冊(1977).
- \*9. マラーティー語, 内藤雅雄ほか編, 全3冊(1977).
- \*10. モンゴル語, 荒井伸一ほか編, 全4冊(1977).
- \*11. トルコ語, 永田雄三ほか編, 全3冊(1978).
- \*12. タイ語, 坂本恭章ほか編, 全2冊(1978).
13. ペルシア語, 勝藤猛ほか編, 全3冊(1978).
14. ハウサ語, 松下周二ほか編, 全3冊(1979).
- \*15. ビルマ語, 藪司郎編, 全3冊(1979).
- \*16. ネパール語, 石井溥ほか編, 全3冊(1980).
- \*17. モンゴル語, 小沢重男ほか編, 全2冊(1980).
18. ベトナム語, 川本邦衛ほか編, 全4冊(1980).
19. 中国語, 大河内康憲編, 1冊(1981).
- \*20. ヒンディー語, 田中敏雄ほか編, 全3冊(1981).
21. パシトゥー語, 縄田鉄男編, 全3冊(1981).
- \*22. アラビア語, 中野暁雄, サラーフ・アル・アラビー編, 全2冊(1982).
23. ハンガリー語, 岩崎悦子ほか編, 全2冊(1982).
- \*24. チベット語, 北村 甫ほか編, 全3冊(1983).
- \*25. フィンランド語, 松村一登ほか編, 全3冊(1983).
26. バンジャープ語, 溝上富夫編, 全3冊(1983).
- \*27. ピリピノ語, 池端雪浦, リリア・アントニオ編, 全2冊(1984).
28. ヨルバ語, 清水紀佳ほか編, 全2冊(1984).
29. トルコ語, 勝田 茂編, 全3冊(1984).
30. 朝鮮語, 大江孝男編, 全3冊(1985).
31. カンボジア語, 坂本恭章ほか編, 全4冊(1985).
32. スワヒリ語, 宮本正興ほか編, 全5冊(1985).
33. 西南官話, 橋本萬太郎, 馬真ほか編, 全2冊(1986).
34. タミル語, 山下博司ほか編, 全2冊(1986).
35. ベンガル語, 溝上富夫ほか編, 全3冊(1986).
36. 中原官話, 中嶋幹起, 賀巍ほか編, 1冊(1987).
37. タイ語, 森幹男ほか編, 全4冊(1987).
38. シンハラ語, 中村尚司ほか編, 全3冊(1987).
- 資料1. スワヒリ語<三日坊主コース>テキスト, 守野庸雄編, 1冊(1985).

## コンピュータ マニュアル シリーズ

1. VSAMEDIT (テキストエディター) 松下周二 (1984).
  2. FONTMAKER (文字フォント作製・修正) 今井健二 (1985).
  3. BUNPOO (文法: 文字コード変換) 今井健二 (1982).
  4. AAFE (文字フォントエディタ) 今井健二 (1985).
  5. AATEDIT (各種言語テキストエディタ) 今井健二 (1985).
  6. 辞書検索表示プログラム 松下周二 (1986).
- 別冊 1. 文字フォントリスト 1 (1987).  
別冊 2. 文字フォントリスト 2 (1988).

## アジア・アフリカ言語データ シリーズ

1. 坂本恭章編, 近世アンコール碑文—KWIC 索引, 1986.
2. MALLIK, B. P., NARA, T., SAKAMOTO, Y., *South-Asian Series—Bengali Language (1)*, 1987.

## 特定研究「言語」出版物

### 「文字と言語」研究資料

- \*1. HASHIMOTO, M. J., *hP' ags-pa Chinese*, 1978.
2. 橋本萬太郎編, 東干語文字の音表化 (資料集), 1978.
- \*3. 橋本萬太郎編, ラテン化新文字 (資料集), 1978.
4. 川本邦衛, 現代ベトナム語 漢語・「漢字語」語彙集 (I), 1979.
5. SCHAANK, Simon H., *The Lu-Feng Dialect of Hakka*, 1979.
6. 吉田 忠, 蘭学における訳語の考察, 1980.
7. 川本邦衛, 現代ベトナム語 漢語・「漢字語」語彙集 (II), 1980.

### 「AA 諸言語と日本語の学習」資料

- \*77-1. 梅田 博之: 基本動詞対照用例集 日本語—朝鮮語 1, 1978.
- \*77-2. 大河内康憲: 基本動詞対照用例集 日本語—中国語 1, 1978.
- \*77-3. 坂本 恭章: 基本動詞対照用例集 日本語—タイ語 1, 1978.
- \*78-1. 梅田 博之: 基本動詞対照用例集 日本語—朝鮮語 2, 1979.
- \*78-2. 大河内康憲: 基本動詞対照用例集 日本語—中国語 2, 1979.
- \*78-5. 奈良 毅: 基本動詞対照用例集 日本語—ヒンディー語 1, 1979.
- \*78-6. 内記 良一: 基本動詞対照用例集 日本語—アラビア語 1, 1979.
- \*78-7. 守野 庸雄: 基本動詞対照用例集 日本語—スワヒリ語 1, 1979.
- 78-8. 梅田博之ほか: 助詞対照用例集 1: 「の」日本語—AA 諸言語, 1979.
- \*79-1ab. 梅田博之ほか: 日本語の発音(朝鮮語を母語とする学習者のための日本語発音教材試案), 1980.
- \*79-3. 坂本 恭章: 基本動詞対照用例集 日本語—タイ語 2, 1980.
- \*79-5. 奈良 毅: 基本動詞対照用例集 日本語—ヒンディー語 2, 1979.
- 79-6. 内記 良一: 基本動詞対照用例集 日本語—アラビア語 2, 1980.
- \*79-7. 守野 庸雄: 基本動詞対照用例集 日本語—スワヒリ語 2, 1980.
- 79-8. 梅田博之ほか: AA 諸言語教育基本語彙表, 1980.

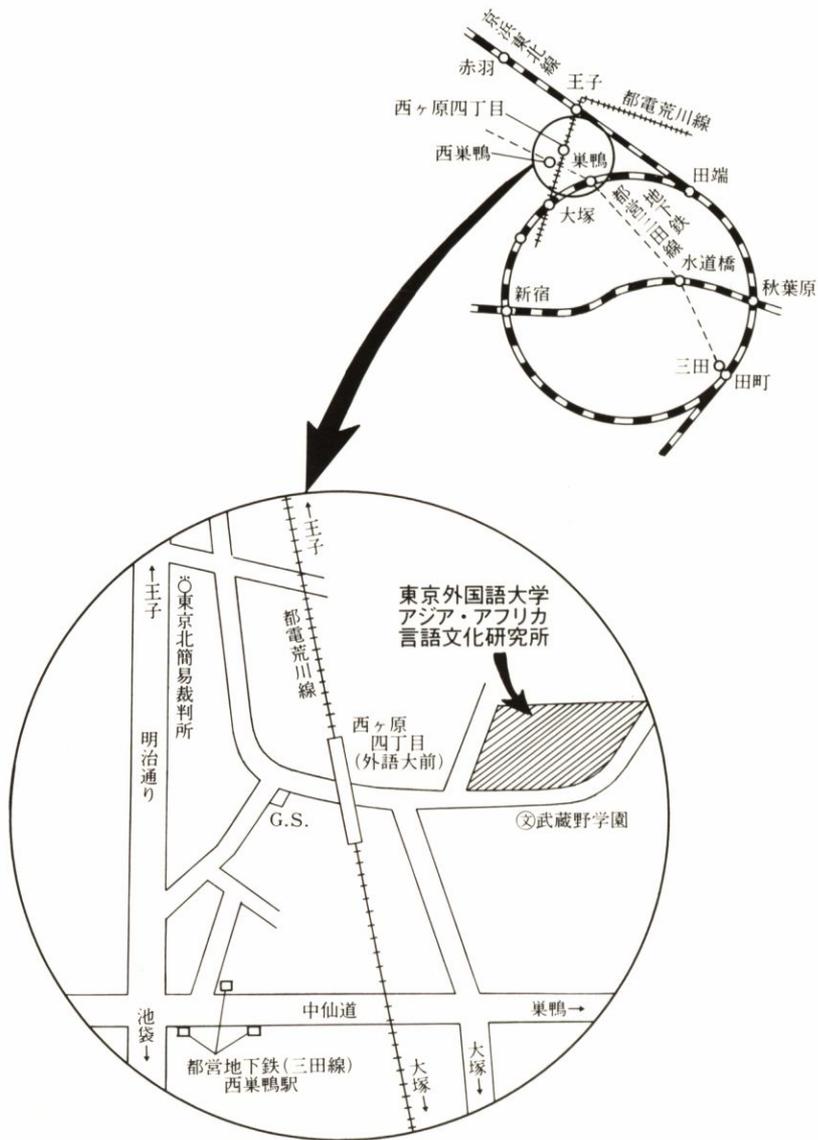
## 一般研究出版物

湯川 恭敏, サンバー語動詞のアクセント, 1983.

### 表紙写真説明

スーダン南部地方に居住する、西ナイル語系バリ族の集落。バリは、サバンナ平原にある独立丘の麓に、屋敷の密集した6つの大集落を営むが、この写真は、その一部分である。写真下部の空地は、ダンスや儀礼が催される広場である。早朝の搾乳が終り、放牧に連れ出される前の牛が休んでいるのが見える。広場に面した、ひときわ大きな小屋は、壮年と長老の2つの年齢階梯に属する男たちの集会場兼太鼓の収納場である、法と政治の中心ともいえる建物である。上部に見える各屋敷は、木柵で囲われ、敷地内には母屋と、やや小さな草葺きの台所と穀物倉がある。この地域には、集住的な大集落が多いが、バリの集落はとくに立派で、壮観ともいえる景観を呈している。

(栗本英世)



アジア・アフリカ言語文化研究所  
東京外国語大学

東京都北区西ヶ原4丁目51番21号 〒114

TEL 03-917-6111 (代)

国電大塚又は王子下車・都電荒川線西ヶ原四丁目

(外語大前) から徒歩5分

地下鉄・都営三田線西巢鴨下車10分